

第1回 鳴門市地域福祉講演会

平成28年8月6日13時30分～15時45分

於 うずしお会館 第1会議室

講師 公益財団法人 さわやか福祉財団 戦略アドバイザー

土屋幸己認定社会福祉士

④ 地域包括ケアシステムについて

もう1つ重要なのがこちらのこの下。地域を基盤とするケアです。退院してきます。家に戻ります。要介護状態っていうのは何かっていうと、慢性期状態ですよ。治療の必要はないけれども、医療も必要、介護も必要、見守りも必要、生活支援も必要ってことになってきますから、ここで重要なのが、地域の支え合いとか助け合いとかを創り上げていくこと。所謂、地域福祉を推進していくことが重要だっていう風に言われてるんですね。

例えば、急性期でもないですけど、認知症の方が地域で生活するためには、1人暮らしであれば見守りも必要であったりとか、先ほど言ったごみの、ごみ捨てのちょっとしたお手伝いが必要だったりとかってことになりますよね。これが、医療と介護だけではできないので、地域社会による参画、住民やボランティアの皆さんの協力が必要になりますよね。

それから、要介護度2、3くらいで、介護保険のサービスとかではできないことがたくさんあります。例えば、介護保険のサービスというのは、その人の住んでいる生活空間とかはヘルパーさんが掃除とかしてくれまんですけど、1人暮らしで部屋の草刈りやってくれと言っても、ヘルパーさんはできません。これ自分の住んでる部屋以外の、生活空間以外の掃除やってって言うてもできません。そういう時に、例えば、地域で住民の皆さんが助け合い活動をやっていて、有償ボランティアでもいいですけども、庭の草刈りだったら1時間300円でやってあげるよとか、500円でやってあげるよとかいうようなサービスがないと、サービスっていうか助け合いがないと、生活できないんですよ。シルバーさん頼んでもいいですけど、庭の草刈りやってもらえば、たくさんお金がかかってしまう場合があります。もちろん、お金がある方は、そういうサービスを自分で購入するっていうのは基本ですけども。あの、年金生活でぎりぎりの人はそういうことでできません。で、そこで、そういう人にはそういう支援も必要になってくるので、この、地域を基盤とするケアという部分で言いますと、医療と介護、それから地域における支え合い、助け合い、所謂、地域福祉がしっかりとできてこない、だめなんだって言われ

ているんですね。だから、地域で尊厳ある生活を進めていくためには、医療と介護の連携体制をしっかりと作りましょう。これは、医療の関係者・介護の関係者・行政が中心となってしっかりと作りましょう。

だけれども、地域生活は地域の人たち、住民やボランティアがしっかりと地域を基盤とするケアを作りましょう。これが、地域の支え合いや助け合いの推進なんだ、ということなんですね。ここがしっかりとできてこないと、ここからどんどん増えてくる先ほど言ったような1人暮らしの高齢者の方や、それからシングルマザーとかね、お母さん1人で子どもさん育てていくケースとか、そういう方たちは支援必要ですよ。子どもが、お母さんが、残業やっていると子どもが1人さみしく留守番してないといけません。土曜日日曜日もお母さんがお仕事に行っていると、家で1人で留守番して1人でさみしく食事をとります。そういう時に、地域に居場所があって、元気な高齢者の方が、子育て世代の方たちが応援してくれていて、1人暮らしの高齢者の方もそこに来てくれていて、土日、1人さみしい子ならここにおいでっていうような地域ができれば、子どもにとっても高齢者にとっても住みやすい街になることなので、この地域を基盤とするケア、これをしっかりと作っていかないと、どうにもならないんだっていうことになってくるわけですよ。

で、ここで、地域包括ケアシステムって言葉をちょっと整理してみると、地域というのは、住み慣れた地域です。これ、おおむね30分以内で駆けつけられる範囲、中学校区なんて条件がされていますけれども、この範囲を、しっかりと自分たちの中で設定すること。中学校区は広すぎるから小学校区にしようか。これは、それぞれの市や町で考えればいいことなんですけれども、基本的にはあんまり広い範囲じゃない。で、富士宮市では、中学校区が11あるので11の生活圏域。で、この中で、大きな中学校区なんかは、地区社協という組織なんですね。全部で14か所出来上がっていましたので、地区社協は中学校区より小さくなりますから、地区社協あたりを1つの地域として考えようと、そんなことを決めました。で、その中で、包括というのは、先ほど言ったように、医療・介護・保健・福祉だけでは、地域生活は支えられませんよね。ですから、この自治会とか地区社協というような知り合いの組織、地域のつながりの組織であったりとか、老人クラブとか、様々な活動をしているボランティアやNPO、企業。こういう人たちに協力をしていただいて、いろんな支援を、包括的に、まとめて地域生活を支える連携の仕組みを作ろうと、こういうようなことを考えていったわけなんですよ。この先ほど言ったような、地域の居場所とか、サロンみたいなのは、厚生労働省が言うにはですね、高齢者人口の10%ぐらいの人が利用できるような居場所を作ろうって言うてるんです。高齢者の方が1万人いたら、1000人分ぐらいが通えるような場所を作ろうってことなんですね。介護保険のデイサービスと、それからみなさんがこれから作って行こう、今作られていってるサロンと居場所の大きな違いってなんですか？介護保険が実施しているデイサービスっていうのは、1つは介護保険料を使ってやってるわけす

よね。本人負担は1割、9割は介護保険料。そこに行くためには、要介護認定がされて、ケアマネさんにプランを作ってもらって、プランに沿って行くっていうことになります。例えばリハビリをしに行く、とか、お風呂に入りに行くとか、っていうことですよ。ですから、デイサービスに通う人、介護保険にくる人は、ご利用者様って言葉をよく聞きますよね。サービスを利用しに行くんです。ところが、サロンとか居場所というのは、そこに行くことによって、お客様じゃないんですよ、主体者として参加する。1人で家に引きこもっていると、認知症になると困るから、出かけてってお話ししようよ。したがない人は、地域の人が声かけておいでって誘って行く。そうすると、そこに行くことによって、その人が元気になっていくんですよ。富士宮市でもそういういくつかサロン、居場所ができて、この間も行ってきました。で、そうすると、認知症の方が来ます。1人暮らしじゃないです。家族がいるんです。でも、お家にいると、いつも家族から「なんで同じ話するのよ！うるさいわよ！わかってるわよ！」って怒られてるとか、「またおばあちゃんどっか行くの？迷子になったらどうするの？」いつも怒られています。で、家では、しょぼんとしてるんですね。ところが、居場所に来ると、お客様じゃないんです、そこにいる人はみんなボランティアと呼ばれていて、所謂、スタッフの人もボランティア、来る人もボランティア。で、「なんで認知症の方もボランティアなんですか」って聞いてみました。じゃあ「この方は、ここに来るとみんなを笑わしてくれるんです。来る度に同じことばかり言うんだけど、笑わしてくれるんです。楽しくてしょうがないから、この人はお笑いボランティアなんです」。さっき吉本の話もありましたけども、お笑いボランティアなんです。場を和ませるんですよ。で、その人は家にいる時のしょぼんとした表情と、居場所にいるときのここにこした明るい表情、別人なんですよ。だから居場所に来ることによってその人は意欲的になります。今度スタッフの人、若い人がいたら、若い女性がいたら怖くて「すみません、女性に年齢を聞いて失礼なんですけど、おいくつですか？」「いいわよ、あたし65よ」「どうしてここでスタッフされてるんですか？」って訊いたら、「3年前夫に先立たれちゃって、子どもはみんな東京に就職しちゃって、いま1人暮らしだから家にいるとほとんど話さないんだって。だからここに来ると、スタッフさんといつも馬鹿笑いして大笑いして、来る人にも笑わせてもらって、楽しくてしょうがないんです。」これ、運営する側も来る側も元気でいられますよね。お互いに介護予防なんです。今までの政策で行ってきた介護予防ってというのは、65歳以上の方はチェックリストっていうアンケートが届いてたの、分かりますか？こうね、ちょっと市役所からアンケートが送られてきて、そこに、週に1度以上外出しないってチェックがつくと、この人放っておくと介護になっちゃうよって人に保健師さんとかが連絡して、予防教室に来てくださいって呼んでたんです。で、予防教室に行くと、何週間か体操したりして元気になります。少しね。で、元気になって家に帰るとどうですか？また1人暮らしで、誰とも話をしない。外にもでない。そうっちゃうとまた状況悪くなってきちゃうんですよ。だから、それは失敗でした

ということで、元気になった人が、地域で通える場所だったり、困ったら、住民やボランティアの方の助け合いがあって、地域で生活が支えていければ、介護状態になる人も減るし、元気な高齢者が居れば、別に高齢者問題もないわけ。その結果をして、無駄な介護保険のお金が使われなくて、保険料も上がらない。実際にこういう居場所を作って、地域の人たちが通った合言葉「元気でいよね」って体操やって、保険料が下がってる地域もあるんですよ。

長崎県の佐々町なんていうのは、そういう活動を展開していく中で、介護保険料が下がってきました。そうすると、自分たちも元気でいるし、払うお金も減ってくるわけですから、こんないい話ないですよ。だから、国の話だけ聞いてると、お金がかかりすぎて困るから、介護保険を抑制しようという風にとらえがちなんです、そこは違うということなんです。じゃ、こういう仕組みをしっかりと作っていくことが、地域包括ケアシステムなんだってことなんです。

で、地域、これからの福祉、これは地域がキーワードになってきます。で、あの、全国的に、先ほど言った中学校区、このデータを見てみますと、例えば1万2000人ぐらいが標準的な小中学校区なんです、こう見てみると、いま高齢者は3300人ぐらいそこに住んでますし、要介護高齢者は594人、認知症の人は429人ですよ。1つの中学校区に429人の認知症の人が生活しています。障害のある人は700人ぐらい。生活保護を受けている人が216人ぐらい。保育園児は226人ぐらい。で、1人親家庭が123世帯。あ、これが母子家庭が123世帯、父子家庭が22世帯。引きこもっているのは69人。で、自殺者は、1年間で1.4人いるってということなんです。これが皆さん自分の中学校区で大体これぐらいの数字がいま、現実的にあるってことなんです。地域っていうのは、高齢者は高齢者、障害者は障害者、認知症の人は認知症の人、生活保護の人は生活保護の人って別々に住んでませんよね。地域みーんな一緒に住んでるわけなんで、こういった様々な問題をしっかりと対応できるような地域の力、地域福祉の力を作っていくと、困っちゃう人たちがたくさんいるってことです。母子家庭の方たち、生活困窮状態になっている人たちがたくさんいます。で、地域の中で、子どもがお母さん働くために夜1人である場合たくさんあります。それほっといたら、様々な問題起きますよね。こういったことを全部行政でやれってできないので、地域の中でそういう問題を把握して、自分たちでできることはやろう、できないことはNPOに頼もう、NPOでもできないことは行政に頼もうって風には、きちんと地域の中で制御していかないと、これからは大変な状況が起きてくるっていうのが現状なんです。併せて、じゃあ、どのぐらいのお金がかかっているか。中学校区では、年金だけで56億円ぐらい、そこにいる高齢者のためにかかっています。医療費は37億円ぐらい。介護の費用は9.5億円。そして、子育て支援として5.3億円ぐらい。これだけの税金がいま投入されていて、この地域は成り立っているってことなんです。

